

③ 三川内地区ってこんなまちです

(三川内地区の歴史)

三川内地区は、北西の隠居岳の山裾にいだかれ、小高い山々に囲まれた平地を小森川が蛇行して流れる豊かな田園地帯となっています。

戦国時代の終わり頃、三川内は平戸松浦氏の領地となっていました。天正14年(1586年)、この地にあった「井手平城」が、大村氏を中心とする連合軍によって落城した際には、多くの戦死者が出たと伝えられています。その後、松浦藩と大村藩の領土協定によって、早岐の一村「折尾瀬村」となり、幕末まで平戸松浦藩の統治を受けました。

明治になると、地域を二分するように鉄道と国道が通り、現在に近い姿になりました。その後、折尾瀬村は昭和30年に佐世保市に編入し、現在の三川内地区となりました。

村の主な産業は農業でしたが、文禄・慶長の役に従軍した松浦鎮信が朝鮮から連れ帰った陶工によって、三川内山に窯が開かれると、窯業も盛んになりました。江永や木原にも窯ができ、平戸藩御用窯としてのあつい庇護のもと、幕府や朝廷への献上品が作られた他、幕末には長崎の平戸焼物産会所から海外へも輸出されました。

長い伝統と匠の技は、更に磨かれながら受け継がれ、三川内焼は現在も清楚な輝きと美しさを誇っています。

現在でも農業と窯業が主体です。農地も基盤整備によって大型機械による耕作が可能となり、米のほかアスパラ・ナス・レタス等の野菜の栽培も盛んになってきました。

また、昭和44年に下の原ダムが完成して以来、東部地区唯一の上水道ダムとして水を送り続けています。交通の面でも、西九州自動車道佐世保三川内インターの開設により、佐世保の東の玄関口となっています。



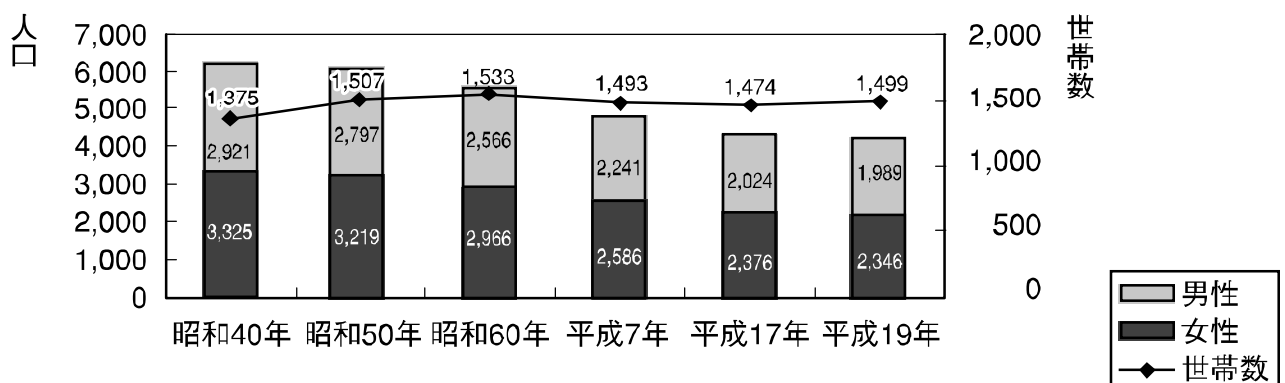
〔三川内皿山の風景〕

★三川内地区って……どのあたりをいうの？

現在、三川内地区と呼ばれる範囲は、次のとおりです。

町名	心野町、横手町、木原町、江永町、吉福町、口の尾町、新行江町、三川内本町、塩浸町、新替町、三川内町、下の原町、桑木場町、三川内新町
----	------------------------------------------------------------------

(三川内地区の人口推移) ※いずれも10月1日時点の統計資料



〈三川内地区“わがまち自慢”〉

三川内地区には“自慢”がいっぱい! その一部を紹介します。

◎400年の伝統「三川内焼」◎

三川内焼は慶長3年(1598年)、当時の松浦藩主松浦鎮信公が朝鮮半島出兵から帰国する際、韓国から約100名の陶工を連れ帰ったことに始まります。

寛文2年(1662年)に天草陶石を磁器の原料として、その見事な白さを表現しました。かつては、瀬戸(愛知県)においても磁器を生産する技術はなく、瀬戸の陶祖として祀られている加藤民吉が、その技法を瀬戸へ持ち帰ったことをご存知の方も多いと思います。

三川内焼は、当時の先進産業であり、その歴史は佐世保の誇りと言えます。



◎盛んな農業◎

戦後の農業は、人力と牛馬を使った作業が主だったので、大変苦労していました。しかし、経済の成長と共に農業も変革が進み、田畑も基盤整備され、作物の通年栽培が可能になりました。それと同時に、あらゆる作物に適応した機械化で、作業の省力化が進みました。

現在は、おいしく低農薬の早期米と普通期米、施設栽培ではナス・アスパラガス、路地栽培ではレタス・きゅうり・ブロッコリー等が多く栽培されています。特に最近では、安心安全をモットーに、低農薬作物の栽培が盛んです。

◎三川内中央運動公園◎

以前は招魂場と呼ばれ、昭和4年に忠魂碑が建立されました。そこには、日露戦争以後に戦死、又は戦病死された地元出身者の名が刻まれ、祀られています。

忠魂碑の前の広場は、以前小・中学校の運動場として使用されていましたが、昭和30年4月に折尾瀬村が佐世保市に合併してから、公園として徐々に整備されました。

現在ではテニスコート2面と立派なグラウンドもでき、地元の行事だけでなく、多くの人に利用され、憩いの場としても大いに活用されています。周りの景色もすばらしく、住民に幅広く利用され、活気のある公園となっています。



◎元気で素直な子ども達(子ども育成会)◎

昭和46年4月、三川内地区の各子ども会の円滑な運営と発展に寄与することを目的に、相互の連絡を図る子ども育成会が設立されました。

主な活動として、町民運動会への参加・野外研修・子ども会大会があります。中でも子ども会大会は、昭和61年に第1回が開催されてから、毎年、学校関係者や地域の方々にご来場いただき、各子ども会毎に練習を重ねた活動を発表紹介しあえる貴重な場となっています。

子どもたちが様々な活動を通して地域との関わりを深め、三川内っ子としての誇りを持って成長してくれることを願い、活動の場作りの手助けを続けていきたいと考えます。